中小規模病院の医療安全対策
＜改善活動による医療機器安全管理の取組み＞

岩国市医療センター医師会病院 医療安全管理室
安永　彰子

岩国市医療センター医師会病院は、一般急性期と回復期リハ病棟合わせて４病棟を有する病床数２０１床の病院である。職員数は約３００名、そのうち医師が２１名で電子カルテシステムは導入されていない。

中小規模の病院では、病院長の声が職員に届きやすく他の職種と連携が取りやすい利点があり、一般職員を巻き込み活動を進めることは、大規模病院に比べ容易であると思う。とはいえ、改善活動には、きっかけが必要である。当院の改善活動として、ＱＣサークル活動の導入、ＮＤＰ（医療のＴＱＭ実証プロジェクト）への参加、医療安全全国共同行動への参加等がある。これらの改善活動が推進できたのは、病院長のリーダーシップと病院幹部の方針が一つにまとまっており､自分たちが得意な改善手法を持っていることによる。

今回の医療安全全国共同行動への参加にあたり、病院全体の医療安全活動として組織横断的に実践する方法を考えた。まず、職員に共通な意識を持たせるため、共同行動のホームページにあるスライド資料を使用して、共同行動キックオフを真似て「院内キックオフ大会」を開催した。次に８つの行動目標の中から「一つくらいなら」と軽い気持ちでスタートし、マトリクス図を使ってテーマを選定した。その結果、取り組む目標は「医療機器の安全な操作と管理」に決定した。

病院長を統括とし、医師、看護師、技術職、事務職で組織横断的にプロジェクトチームを立ち上げた。そして、共同行動ホームページにある支援ツールに導かれ、プロジェクトチームが医療機器を管理するＭＥ室と輸液ポンプ・人工呼吸器に分けた２つのＱＣサークルを支援する形で活動を進めた。

器械サイドへの対策は、３名の臨床工学技士が在籍するＭＥ室が中心で行った。ポンプ類はすでに中央管理していたが、使用機種の統一化ができていなかったため、一番数の多い機種を病棟で使用する統一機種とした。その他、点検計画と実施、パソコンを使った管理体制の構築を行った。人間サイドの対策は、ＱＣサークル活動で進めた。輸液ポンプのサークルは現状把握から問題点の要因分析を行い、実行可能な４つの対策に絞った。

１）医師に正しい注射指示の出し方を説明し、マニュアルを掲示した。

２）看護師対象のポンプ勉強会を開催。

３）簡易操作マニュアルを作成し、各ポンプに設置。

４）使用者の指導を統一化するため、ポンプ指導者を決めて技術チェックリストを活用した指導研修会を開催した。

技術チェックリストは、共同行動の支援病院である武蔵野赤十字病院のツールを参考にした。人工呼吸器のサークルも、ほぼ同じような対策実施となったが、活動の波及効果として、気管内挿管直後の人工呼吸器の初期設定を決めることができた。チャレンジ対策である医療機器使用者の認定制度は、看護師長の管理下で技術チェック合格者の名札に認定シールを貼った。また、これらの活動が定着しているか監査するのはプロジェクトの役割とした。

今回の改善活動により、ＱＣサークルメンバーからは「他部署との交流が深まり楽しく活動できて良かった」などの声が聞かれた。また、職員の中には新たな改善活動に向けた取り組みを始める者もおり、職員全体の意識が変わったことを感じている。

中小規模病院は、マンパワーが不足がちで、新しい改善活動は業務の負担になると消極的になる傾向にある。しかし、目標を一つ掲げ、医療安全全国共同行動の支援ツールに助けられ導かれながら、地道にかつ継続的に改善手法を活用した安全対策を続けていくことが大切であると思う。私たちの病院の改善活動が、他の中小規模病院の安全対策に少しでも役立てていただけたらと考え、今後も参考になるものがあれば提供していきたいと思う。